

編集後記・Editorials

魚類学雑誌 68(2):203-203
2021年11月5日発行

魚類学雑誌 68 巻 2 号をお届けします。前号では印刷スケジュールにギリギリ間に合わない論文が数編あったため再び“薄く”なってしまう、心配の声が私の元にも届きました。ご安心ください。今号は原著論文 7 編、記録・調査報告 5 編、そしてシリーズ原稿となり“厚い”冊子となりました。魚類学雑誌の書架スペースにつきまちは引き続き空間の確保をお願いいたします。今号の構成は分類、分布、集団遺伝、生活史、行動、保全など多岐にわたり、対象魚種も淡水魚から深海魚、南日本から北日本、板鰐類から棘鰭類とさまざまです。近年の中では最も多種多様な一冊になっているのではないのでしょうか。

今回は編集にまつわる話を少しご紹介します。魚類学会の学会誌 (*Ichthyological Research* と魚類学雑誌) の受理原稿は、各主任が入稿に向けて最終確認と体裁の調整を行います。近年は順調に成長を続けている両学会誌ですが、掲載原稿の増加に伴い、この最後の主任業務がなかなか大変な状況になりつつありました。また、公表までの時間が遅くなるという、著者に対してネガティブな影響も懸念されました。状況を改善すべく編集委員会要望として学会に陳情した結果、編集補助員の雇用が認められました。現在、編集補助員の A さんには主に原稿体裁の最終調整をご担当いただいておりますが、実はこちらの A さん、一線を退かれています。魚類学分野で博士の学位をお持ちです。語学堪能で事務業務もこなせるスーパーマン／ウーマンです。おかげさまで、要修正箇所の見落としが大幅に減り、全主任（おそらく歴代主

任の多くも）が苦手とする魔境「引用文献」のチェックからも解放され、編集スピードも著しく向上しました。編集補助員の雇用をお認め頂けたこと、編集委員会を代表しまして会員の皆様に御礼申し上げます。

残念ながら今年度の年会も対面での実施が見送られました。一方、9月18-20日にはウェブ大会が開催され、今年度は学生会員を対象とした優秀発表賞と中学生・高校生発表賞、そして公開シンポジウムが復活し、オンライン形式とはいえ従前の年会に近い内容となりました。また、7月にはオンラインを用いたイベントが「若手の会」によって行われ、多くの若手会員が参加したとのこと。イベントの概要は今号にて報告記事が掲載されておりますのでぜひご覧ください。

68 巻の編集にあたり、下記の方々には原稿の校閲でご尽力いただきました。ここに記して御礼申し上げます（敬称略）。

荒山和則、井口恵一郎、乾 隆帝、今村 央(2)、鬼倉徳雄(2)、甲斐嘉晃(4)、川瀬裕司(2)、木村克也(2)、木村清志、日下貴裕、國島大河、久米 元、久米 学(2)、栗岩 薫、黒木真里、小枝圭太、小北智之(7)、古屋康則(2)、佐藤 崇、佐藤真央、下瀬 環、鈴木寿之、須之部友基、瀬能 宏、田城文人(7)、立原一憲、田中文也、土居内 龍、東海林 明、富永浩史、中島 淳(2)、中野(小西) 繭、畑 啓生、畑 晴陵、原 康二郎、原田慈雄、藤原恭司、松井彰子、松沼瑞樹、三澤 遼、望岡典隆、柳下直己、山川 武、山口敦子、山本哲史、横田高士(田城文人)